

「東海毎日新聞」について

戦後刊行の「東海毎日新聞」

戦後、既存紙が用紙統制を受けるなか、東海毎日新聞は1946年8月15日に創刊した新興紙である。伊藤金次郎が東海毎日新聞社代表取締役となり、主筆、編集局長をかね、社長を山崎延吉とした。「農業と宗教唯一の新聞」とした日刊紙で、毎日新聞本紙の再進出に伴い、1952年11月に終刊する。名古屋市鶴舞中央図書館に所蔵されているのは、そのうちの1946年9月1日（17号）-1952年11月（うち1951年1-3月欠）である。

山崎延吉は久野庄太郎から愛知用水の構想を聞いたのち、亡くなるまで愛知用水の実現に尽力するが、本紙を通して、その姿を垣間見ることができるだろう。

明治用水の都築弥厚翁の事績を小説化した毎日新聞記者・岸哲夫の小説『明治川』が1946年10月に藤谷崇文館（大阪）から刊行され、1948年1月には表紙に「運河開削秘史」と記され再版された。久野庄太郎が愛知用水実現のため、同志たちには『雨邨水利史談』（溝口三郎編、片原謙原著）を購入して配り、各方面に『明治川』を買い入れて配布したとされる（『愛知用水史』p.136）。その後、『明治川』は「東海毎日に特別の好意をもって連載をすすめられ」（東海毎日新聞1950年8月3日付）、構想を改め1950年8月8日から11月27日に連載小説「明治川」として掲載された（111回）。これも1952年11月に黎明書房（名古屋）から書籍化されているが、あとがきには小説連載の間に「熱心な読者から手紙やハガキをたくさんもらった」として、「愛知用水推進者の一人である久野庄太郎氏らの苦心談が、私の心を打った」と記している。

緋田工は「愛知用水運動が始まって間もなく、明治用水の都築弥厚翁の事績を小説化した「明治川」と題する小説を数千部購入して、関係方面へわれわれの手で贈呈して参考に供したことがあるが、その購入資金は加藤（注：周太郎）氏の喜捨によるものであった。」（ナゴヤジャーナル連載「愛知用水運動の回想」12〈1955年10月〉）としており、この本が新聞連載の前後どちらかにあたるかはわからないものの、東海毎日新聞の連載もまた愛知用水運動としておこなわれたと思われる。

東海毎日新聞

1946年8月15日創刊。戦後、既存紙は用紙統制を受け、かつ毎日新聞は名古屋から撤退していたため、ダミー新社を立てて創刊した新興紙。「農業と宗教」を編集基本としていた。地紋は麦と稲穂。毎日新聞本紙再進出に伴い、1951年休刊（事実上の終刊）。（Wikipedia）

伊藤金次郎 1892-1964

大正-昭和時代の新聞人、評論家。明治25年8月1日生まれ。大正7年東京日日新聞社（のちの毎日新聞社）にはいり、社会部長、名古屋支局長などをつとめる。昭和21年東海毎日新聞社の代表取締役となり、主筆、編集局長をかねた。のち愛知県公安委員長。昭和39年7月31日死去。71歳。愛知県出身。著作に「わしが国さ」など。（日本人名大辞典）

東海毎日新聞に掲載された愛知用水関連記事

- 19471229 東海毎日新聞 (1面) 「お庭は畑 高松の宮さま 山崎本社長と暮れのお語らい」
19480724 東海毎日新聞 (1面) 「知多半島 (愛知) 貫く水利計画」
19480802 東海毎日新聞 (1面) 「木曾川を知多半島へ流す」
19480806 東海毎日新聞 (1面) 「知多の背骨へ水上げて干バツを吹っ飛ばす」
19480810 東海毎日新聞 (1面) 「協力・取組む大事業 知多半島の水利完成を期す 山崎延吉」
19480820 東海毎日新聞 (1面) 「水を呼ぶ知多 ここ許りは天を恨む」

→「愛知用水」と書かれている。

- 19481229 東海毎日新聞 (1面) コラム「東海日記」
19490326 東海毎日新聞 (1面) 「慕われる農村の父 山崎延吉翁喜寿祝賀会申込み殺到」
19490404 東海毎日新聞 (1面) 「山崎延吉翁喜寿記念農業講演会」告知
19490407 東海毎日新聞 (2面) 「はるばる熊本からも 盛大山崎翁喜寿祝賀会」

→久野庄太郎が農民代表としてあいさつ

- 19491111 東海毎日新聞 (1面) 「農林省のお歴々 愛知用水を視察」
19500129 東海毎日新聞 (1面) 「米国農業を視察して①」
19500130 東海毎日新聞 (1面) 「米国農業を視察して②」
19500131 東海毎日新聞 (1面) 「米国農業を視察して③」
19500201 東海毎日新聞 (1面) 「米国農業を視察して④」
19500429 東海毎日新聞 (4面) 「農家揃って電化 アメリカのTVA」
19500702 東海毎日新聞 (1面) 「高松宮さま 愛知用水関係地を御視察」
19500713 東海毎日新聞 (1面) 「高松宮さま 愛知用水を御視察」
19500714 東海毎日新聞 (1面) 「高松宮さま 本社記者対談 用水工事は生産的」

高松宮の発言

- ・「木曾川総合開発の一翼としてみるが正しいゆき方だろうね」
- ・「小利害をこえた利益をもたらす計画だから誰でも喜ぶべきはずのものだろう」
- ・「大きな食糧増産になると思う」
- ・「狭くて水の多い日本で生活の基となる水のない都会がいまの中部地方にあるというのがオカシイ、これでは文化都市とはいえない、水道のない都市にも水を通し農村に園芸、畜産、水産の各業が振興すればいまの日本にとってどれだけプラスになるか判らぬ」
- ・「工事費が大きくそれも貨幣価値も十年前とひどく違っているので数字におどろくことはなかろう、またこれには理解力として文明的な常識が要る」
- ・「現在の失業を救いさらにその工事の完成が将来喜ばれるならこの工事費は決して消費的でなく生産的なものだから工事は大きな意義がある」
- ・「早く着工し完成を期すべきだ」

- 19500803 東海毎日新聞 (1面) 「次の連載小説 明治川」
19500808 東海毎日新聞 (2面) 「明治川 (1) /期待する『明治川』」
19500814 東海毎日新聞 (2面) 「明治川 (7)」
19501014 東海毎日新聞 (2面) 「『明治川』そのままに 今ぞ稔る先賢の達識」

→『明治川』が記事名に使われている。

- 19501105 東海毎日新聞 (1面) 「原始的農業生活の清算へ 戦後高まった青年の研究熱 大府町に連絡協議会」
- 19501123 東海毎日新聞 (2面) 「明治川 (107) 結び (一)」
- 19501124 東海毎日新聞 (2面) 「明治川 (108) 結び (二)」
- 19501125 東海毎日新聞 (2面) 「明治川 (109) 結び (三)」
- 19501126 東海毎日新聞 (2面) 「明治川 (110) 結び (四)」
- 19501127 東海毎日新聞 (2面) 「明治川 (111) 結び (五)」完
- 19501206 東海毎日新聞 (2面) 「浪曲文化協会結成記念 豪華浪曲合同大会」案内
- 19510403 東海毎日新聞 (1面) 「木曾川の調査に 160 万円支出予定」
- 19510605 東海毎日新聞 (2面) 「木曾川支流に大ダム (二子持ダム) 4ヶ年計画、工費 35 億円で」
- 19510608 東海毎日新聞 (1面) 「愛知用水が完成すれば 農業の工業化が実現」
- 19510630 東海毎日新聞 (2面) 「最近のアメリカ農業」
- 19510916 東海毎日新聞 (2面) 「生徒より先生の方が多い 知北農業研究所」
- 19520124 東海毎日新聞 (1面) 「木曾川水系の総合開発審議会が発足」
- 19520412 東海毎日新聞 (1面) 「ものになる愛知用水 課題 綿密な調査報告」
- 19520425 東海毎日新聞 (2面) 「ラジオ・スターの出演料番附」
- 浪曲部門での出演料の1位は広沢虎三 35,000 円、三門博は 30,000 円 (1952 年の大卒初任給 (公務員) 6,500 円)
- 19520531 東海毎日新聞 (1面) 「5 日に総代を選挙 愛知用水土地改良区」

高松宮の愛知用水関係地視察について

東海毎日新聞

- 19500702 東海毎日新聞 (1面) 「高松宮さま 愛知用水関係地を御視察」
- 19500713 東海毎日新聞 (1面) 「高松宮さま 愛知用水を御視察」
- 19500714 東海毎日新聞 (1面) 「高松宮さま 本社記者対談 用水工事は生産的」

と高松宮の愛知用水関係地視察について 3 日間に渡って大きく取り上げているが、他紙ではどうだったのだろうか。

- 19500712 朝日新聞中部支社 (名古屋版) 「高松宮 12 日御来名」
- 19500716 毎日新聞中部支社 (3面) 「来名の三笠宮本社で御歓談 高松宮妃殿下も御一緒」

どちらも数行の記事で、後の記事は高松宮が視察したことが添えられているに過ぎない。また中部日本新聞には高松宮の記事はなかった。

初めて新聞紙面に出た久野の愛知用水構想の記事 (1948 年 7 月 18 日) について

愛知用水運動の展開のなかで語られる新聞記事のなかに、1948 年 7 月 18 日の初めて新聞紙面に出た久野の愛知用水構想の記事というのがある。浜島辰雄はその記事を見つけて久野宅に向かいふたりは出会ったとされる。その記事にあたってみると、1948 年 7 月 18 日の中部日本新聞 3 面、尾張版に「発展する知多の夢 その名も愛知用水」という記事が見つかる。浜島の見たのはこの

尾張版の記事のようである。7月16-22日の中部日本新聞（朝・夕）、朝日新聞（大阪本社）、毎日新聞（名古屋版コーナーあり、東海毎日新聞とは別）をあたってみたが、他に同様の記事を見つけることはできなかった。

中部日本新聞3面、尾張版のこの記事を見た地元の農民は、それぞれに同様の夢を見ていたことだろう。これまで浜島辰雄は記事を見て駆けつけてきたということが記されてきたが、それは数日経ってからのことで、記事を見てすぐに駆けつけたのは知多農村同志会の山本和孝であり、久野と山本は一晩語りあったということである。

（公財）愛知・豊川用水振興協会研究員 達 志保